

聖書：コリント人への手紙第二 7：5～16

説教題：救いに至る悔い改め

日時：2025年1月5日（朝拝）

今日の箇所は7章5節は、前にも述べましたように、2章13節までの部分と良くつながります。パウロが2章13節までに書いたことは、緊急事態発生のため、突如行ったコリント訪問が残念な結果に終わったことについてでした。パウロはエペソに戻り、涙の手紙と呼ばれる手紙を書いてテトスに託し、コリント教会へ遣わしました。その手紙がどう受け止められたかを案じながらパウロはトロアスまで来ました。本来そこでテトスと落ち合っただけでコリント教会の様子を聞く予定でしたが、彼は来ません。パウロは居ても立ってもいられなくなり、さらにコリントに近いマケドニアまで進みました。そのことが2章12～13節にこう記されていました。「私がキリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いておられましたが、私は、兄弟テトスに会えなかったのも、心に安らぎがありませんでした。それで人々に別れを告げて、マケドニアに向けて出発しました。」そのマケドニアに着いた時のことが今日の7章5節以降に記されます。パウロはここで神に大いに慰められる経験をします。しかしその話に進む前にパウロは「使徒論」について述べて来ました。それはコリント教会に入り込んでいた偽使徒たちの影響を受けて、ある人々がパウロを見下すようになっていたからです。苦難の中にあるパウロ、弱い状態にあるパウロを神の使徒ではないと見る人たちがいたからです。そこでパウロはキリストに従う苦難の道を行く者こそ真の使徒であり、真の信仰者であること、そしてそのような弱い状態にある者を通して神はご自身の栄光を豊かに現されることについて述べて来ました。その話を一旦終えて今日の箇所で話が元に戻っています。彼は神が与えてくださった慰めについて語るのです。

5節に「マケドニアに着いたとき、私たちの身には全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいました」とあります。「外には戦いが」とあるのは迫害や反対活動があったということなのでしょう。ピリピ人への手紙やテサロニケ人への手紙を読むと、これらマケドニアの諸教会は継続して迫害される中にあったことが分かります。そして「内には恐れがありました」とあります。これは迫害に伴う心の中の恐れかもしれませんが、おそらくはコリント教会を思うがゆえの恐れと思われる。あの手紙はどう受け止められたのか、なぜテトスは戻って来ないのか、パウロの心には安らぎがな

く、恐れがありました。6 節にある通り、気落ちした状態にあったのです。あのパウロも諸教会を思う心遣いのゆえに、このように気落ちすることがあったのです。

しかしついにテトスがやって来たことによってパウロは慰められました。これは神による慰めだと彼は言います。パウロはこの手紙の冒頭 1 章 4 節で「神は、どのような苦しみのおきにも、私たちに慰めてくださいます」と言いましたが、このマケドニアでの経験を思い浮かべながら、その言葉を書いていたのでしょう。まずパウロはテトスが来たことによって慰められました。彼はパウロの同労者です。彼は無事でした。その彼の顔を見て、彼と会ってパウロは神によって慰められました。さらに「テトスが来たことだけでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められました」とパウロは言います。つまりコリント教会の対応によってということです。「私を慕うあなたがたの思い、あなたがたの深い悲しみ、私に対する熱意を知らされて、私はますます喜びにあふれました」と続きます。前回の緊急訪問の際、コリント人たちはパウロの側につかず、まるで反対者たちと一緒にあってパウロを見捨てたような扱いをしてしまいました。しかし今や彼らがパウロを慕っていることをテトスは知り、慰められました。またパウロの手紙を通して彼らが深く悲しんでいることも知りました。これはこのあと見るように正しい応答です。またパウロに対する熱意を持っていました。すなわち手紙を読んでただ悲しむだけでなく、熱心に応答しようと、それを行動に表しました。そのコリント教会の姿に接してテトスは慰められ、その報告を彼が持ち帰ったことによって、パウロも大いに慰められ、また喜びにあふれたのです。

その中身を具体的に述べたのが 8 節以降です。「あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、私は後悔していません」とあるところの「あの手紙」とは、2 章 4 節で述べられたパウロが涙ながらに書いた手紙のことです。それはコリント教会の悔い改めを求める厳しい内容のものでもありました。その手紙は確かにコリント教会を悲しませました。8 節の言葉遣いから伺えることは、パウロはその手紙を送った後、後悔する気持ちもあったということです。しかし今は喜んでいると言います。それはコリント人たちが「悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです」と言います。彼らは神のみこころに添って悲しみました。神の意図に添う仕方で正しい悲しみの道を進みました。従って害を受けることなく、逆に益を受けることとなったのです。

10 節に悲しみには2種類あることが述べられています。一つは「神のみこころに添った悲しみ」です。これは「後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせ」とあります。まず言われているのは悔い改めに至ったということです。この悔い改めは何よりも神の御前におけるものです。神に対して罪を犯したことを認めることです。そしてこれは神への信仰とセットです。もし自分が罪を犯したことを認めても、神が決して赦してくださらない方であるなら、そうすることに何の意味があるのでしょうか。ただ罰されることが待っているだけなら、私たちは進んで自らの罪を認めようとはしないでしょう。しかし神はご自身の前で正直に自分の罪を認め、悔い改める者を決して蔑まれないお方です。詩篇 51 篇 17 節：「神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。」神がこのような方であることを仰ぐ信仰とセットで、私たちは勇気を得て、恐れることなく自分の罪を正直に御前で認め、告白することができるのです。

コリント人たちもその神の御前で自己弁護せず、自分たちの誤りを認めました。そして神の赦しを感謝し、自分たちが犯した罪を憎むようになります。同じことを繰り返したくないと思うのです。そして神の恵みにより頼んで、神に喜ばれる生活、正しい生き方に進むことを願う者とされるのです。このように悔い改めとは私たちの知性、感情、意志のすべてに影響を与えるものです。この悔い改めを通して人は救いに至るようへと導かれて行きます。またこの悔い改めは一生涯なされるもの、繰り返しなされるべきものです。そしてこのような悔い改めに後悔はありません。確かに悔い改めに伴う悲しみはあるのですが、そこには悔い改めを通してでなければ知ることができない甘美なものがあるのです。神に赦されることの素晴らしさを体験し、益々救いに向かって前進・成長する者とされる喜びがあるのです。

もう一つの悲しみは「世の悲しみ」です。こちらは神との関係で悲しむということがありません。これは世俗的な悲しみです。罪の結果だけを悲しむというものです。心痛い経験をしたとか、恥をかけたとか、人々からの信頼を失ったとか、経済的損失を被ったとか、病気になったとか、……。そして自分が思い描いていたのとは違う人生になった。そういう自分は悲惨であり、かわいそうである。そういう自己憐憫の悲しみです。こういう悲しみは、そうではない人々へのねたみや苦々しさ、怒りなどに表れたりしますし、その一方では絶望に至ります。その先にあるのは死です。ローマ人への手紙 6 章 23 節に「罪の報酬は死です」とありますが、悔い改めがないなら、

最後に行き着くのは死となります。

この 2 種類の悲しみは聖書に出て来る人物を通して具体的に考えることができます。まず神のみこころに添ったのではない、この世の悲しみの旧約における一例として、創世記に記されているカインをあげることができます。彼は弟アベルを殺す罪を犯した後、神に問われた時、「私は弟の番人なんでしょうか」と答えて、全く悔い改めの心がないことを示しました。そして罰が宣告されると、それは「大きすぎて、負いきれません」と文句を言うばかり、罪の結果を嘆くばかり。そして人に打ち殺されることはないという神の約束を取りつくと、さっさと神の前を出て行きました。その先に真の祝福がないことは誰もが読み取るところです。

また新約における一例として十二弟子の一人ユダをあげることができます。彼はイエスを銀貨 30 枚で売った後、悲しみました。しかしそれは神のみこころに添った悲しみではなく、自分がしたことを後悔しただけです。赦しを求めて神に近づくことをせず、自分一人で解決しようとして絶望の果てに彼は自殺しました。

反対に救いに至る悔い改めの道を進んだ人として旧約聖書からダビデをあげることができます。彼は殺人だけではなく、姦淫の罪まで犯しました。そういう意味では先のカインよりもひどいと言えます。しかし彼は預言者ナタンに罪を指摘された時、即座に自分の罪を認めました。主の前に自らをさらけ出して罪を告白し、主の赦しと聖めを経験しました。その彼は罪から離れて救いに至る道を歩み、素晴らしい証しを残しました。

また新約における一例としてペテロをあげることができます。彼は三度も主を否みました。彼は罪深い自分を知って愕然とし、激しく泣きました。それは神のみこころに添った悲しみでした。彼は悔い改めて主によりすがり、新しい人とされて、豊かな実を結ぶ人とされて行きました。

このコリント人たちもそうです。彼らの悔い改めは生活の変化となって現れました。11 節：「見なさい。神のみこころに添って悲しむこと、そのことが、あなたがたに、どれほどの熱心をもたらしたことでしょう。」そして具体的な変化のいくつかがあり、リストされています。「弁明」とは自分たちが犯した罪を反省して正しく解決する努力を

した事。「憤り」とはパウロに不当なことをした人への憤り、またそれに正しく対処しなかった自分たちの罪への憤りでしょうか。「恐れ」とは、そういう行動を取ってしまったことについての神の前でのふさわしい恐れ。「慕う思い」はパウロとの交わりを回復したいという願い。そして「熱意」「処罰」とは悔い改めて今度こそは正しい行動をしようとしたこと、特にパウロの手紙にあった通り、罪を犯した兄弟に正しい戒規を行ったことでしょう。このことをもって「あの問題について、あなたがたは自分たちがすべての点で潔白であることを証明しました」とあります。「あの問題」とは、パウロが緊急訪問した際、ある人がパウロを罵倒し、その結果、パウロがその地を去らなければならなくなった事件のことでしょう。その時、コリント人は正しく対処しませんでした、こうして悔い改めて正しく応答したことをもって、今や非難されるところがない者として自分たちを現したということでしょう。

12 節は、パウロの手紙はコリント人たちのこのような熱心が明らかにされるためのものだったということです。それは不正を行った人を糾弾するためでも、被害を受けたパウロ本人のためでもなく、あなたがたに与えられている神の恵みが明らかに示されるためのものだったのであると。

そして最後の 13～16 節には、このコリント人の悔い改めが周りの人々に和解と喜びをもたらしたことが述べられています。まずパウロがこのニュースに接して慰められました。何よりも彼らが救いの道をまっすぐ進んでいることを知ってです。そしてテトスもそうでした。彼は祈りながら、心配しながら今回の働きに当たったのでしようけれども、素晴らしい結果が導かれて今や安らいでいます。パウロは以前、コリントに遣わす前のテトスにコリント教会のことを誇っていたと 14 節にあります。彼らは主の導きの下にある兄弟姉妹であるとしてパウロは彼らを信頼し、推薦していました。その通りであることが今回のことによって証明されました。テトスはコリントへ行った時、コリント人たちが主への従順に生きており、また神の御前で恐れおののきながら迎えてくれたことを思い起こし、あなたがたへの愛情をますます深めていますとあります。そして最後の 16 節に、パウロもすべてのことにおいて、彼らに信頼を寄せることができることを喜んでいきますとあります。このように神の前における悔い改めは、神との関係ばかりでなく、他の人との関係にも和解と喜びをもたらすものとなります。もし私たちが悔い改めるべき時に悔い改めないなら、私たちは神との関係において和解のない状態が続くばかりか、他の人との関係においても和解のない状態

が続くことになります。そこに喜びはありません。しかし悔い改めるなら、神との和解だけではなく、他の人々との和解も導かれ、パウロがここで書いたような喜びがお互いの間に満ち溢れることになるのです。

コリント人たちはパウロの手紙を通して悔い改めに導かれましたが、私たちはどんな時にそう導かれるでしょうか。色々な機会があると思います。御言葉を讀んだり、御言葉に聞く中でそう導かれるかもしれません。祈る中でそう導かれるかもしれません。あるいは日常の出来事の中でそのように導かれるかもしれません。あるいはコリント人と同じく、誰かからの指摘や言葉によってその機会が与えられるかもしれません。その時、心が頑なであれば私たちは何も変わりません。自分を弁護し、かえって他の人を責め、攻撃する思いで一杯になるでしょう。そうして分裂、分派、仲たがいという悪を促進するかもしれません。しかし神の御前で考えて、悔い改めることができるなら幸いです。その人は神に赦され、聖められる喜びを新たに体験する者となり、神に信頼して新しい歩みに進む者とされます。また神との関係ばかりでなく、周りの人々との関係も良いものとされ、そこにおいても平和の喜び、癒やされる喜び、それ以外では味わうことができない甘美な祝福を味わう者とされます。この道を私たちはこの新しい年も進む者でありたいと思います。悔い改めを通して一層救いの道を進み、神との平和と人々との平和の祝福にいよいよ深くあずからせていただく恵みの一年を御前に歩む者とされたいと思います。